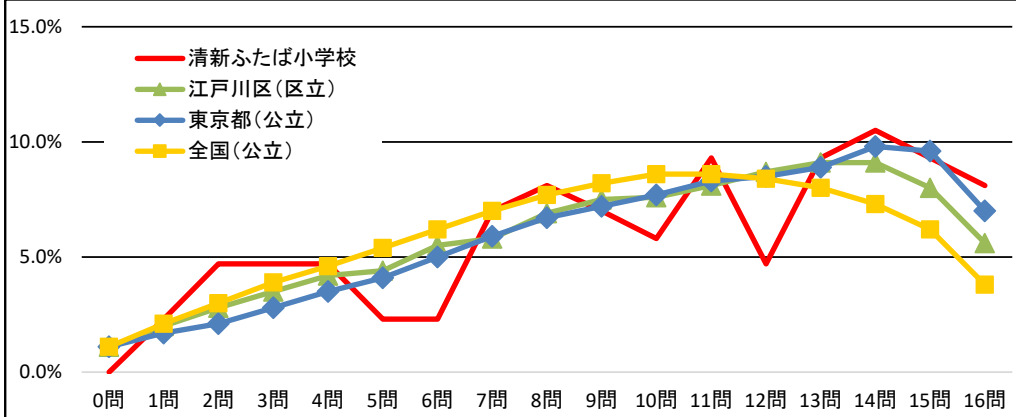


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】 清新ふたば小学校

正 答 数 分 布

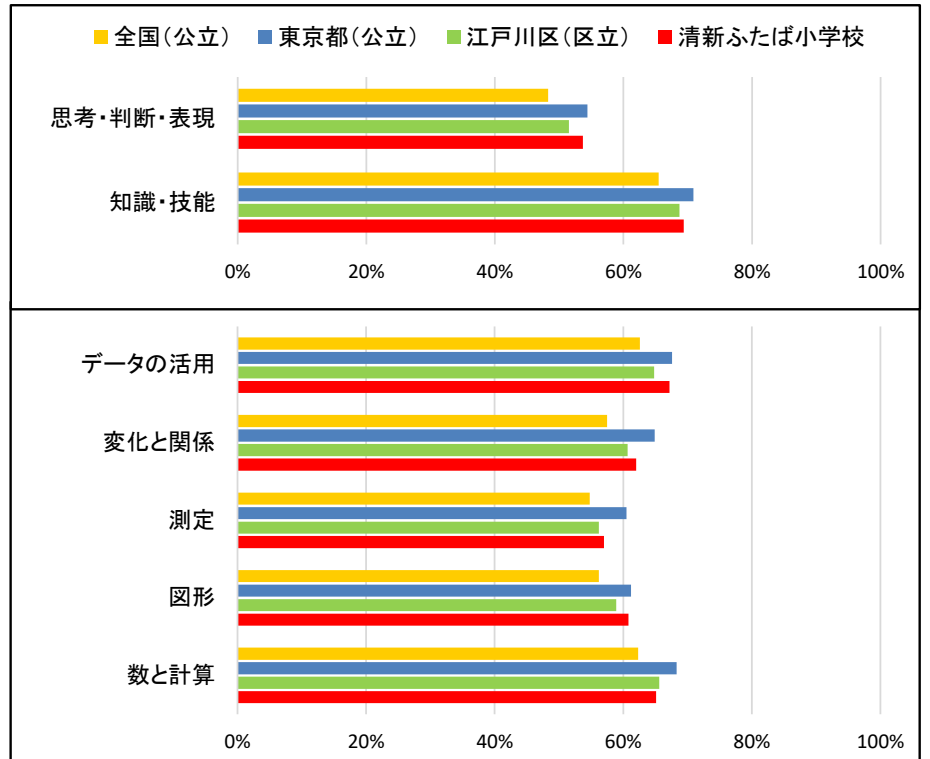
平均正答数
清新ふたば小学校: 10問
東京都(公立): 10.2問
江戸川区(区立): 9.8問
全国(公立): 9.3問



【平均正答率の差】

清新ふたば小学校	63%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	-1.0

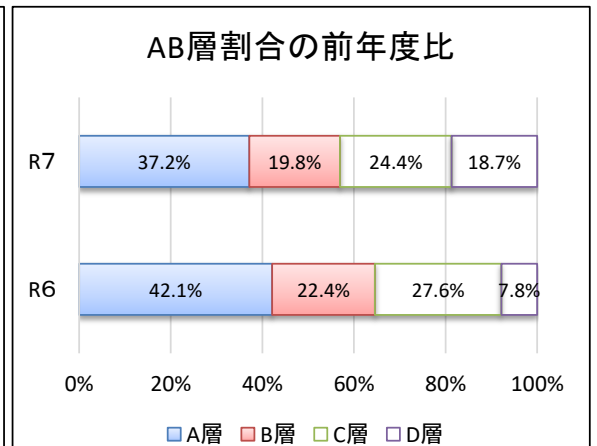
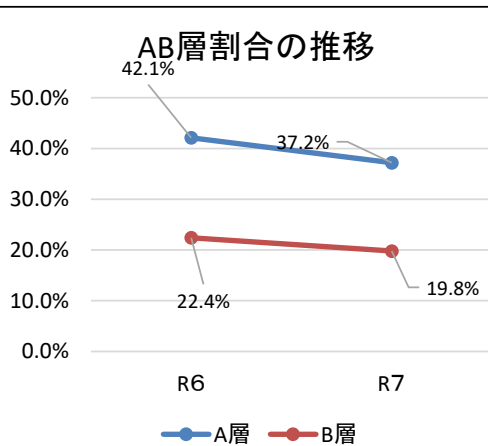
「領域別」の結果



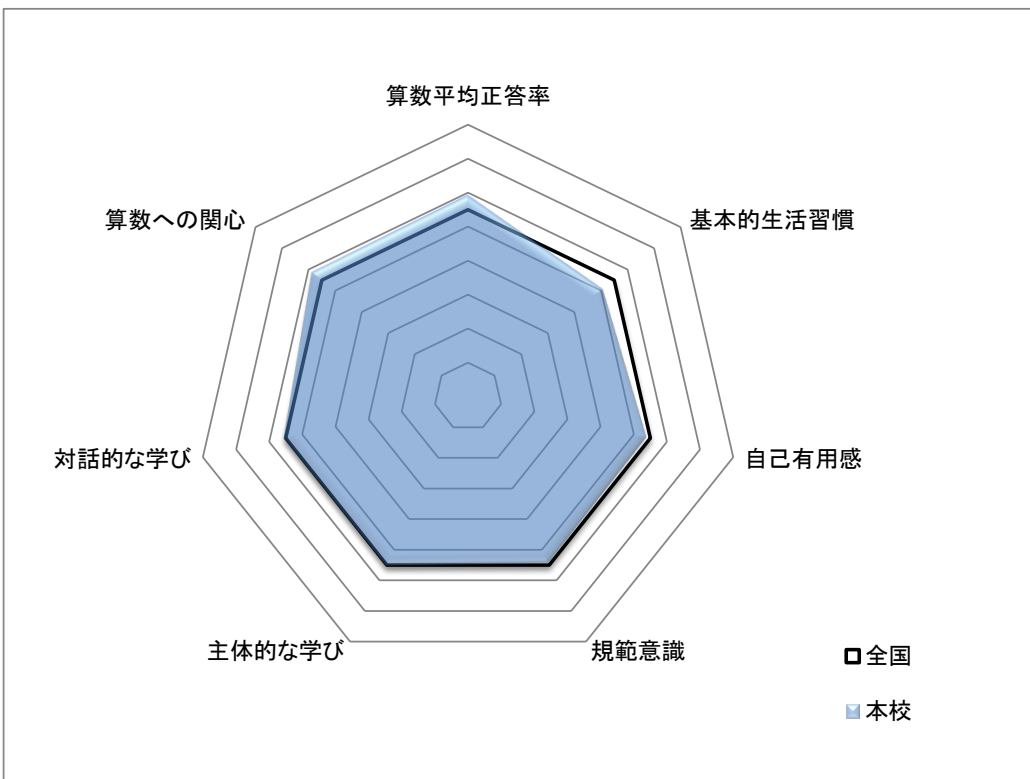
四 分 位 に お け る 割 合 (都 全 体 の 四 分 位 に よ る)

算 数	上位 ← → 下位			
	A層 14～16問	B層 11～13問	C層 7～10問	D層 0～6問
清新ふたば小学校	37.2%	19.8%	24.4%	18.7%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各 領 域 に お け る 、 全 国 平 均 正 答 率 及 び 、 全 国 の 肯 定 的 回 答 合 計 値 を 基 準 と し た 場 合 の 、 本 校 の 様 子 。



《チャートの特徴》

ほとんどすべての項目において、全国平均値を上回っていた。一方で、国語科同様に気になる値は、基本的な生活習慣である。生活習慣の乱れは、学習への意欲だけでなく心身の豊かな成長を妨げてしまう。高学年という発達の段階を加味したとしても、この結果は真摯に受け止め改善を図っていく必要がある。

《家庭・地域への働きかけ》

国語科同様、毎日の家庭学習における計算の学習の見守り、声掛けや、単元ごとのワークテストの復習を推奨していく。加えて、基本的な生活習慣の乱れからくる心身の不調がチャートの特徴、児童の様子から見受けられる。そのため、携帯電話やタブレット端末の使用の仕方、習い事と学校の両立、就寝時間の改善などご協力を得られるよう、引き続き声を掛けていく。

《現状把握》

●AB層の割合と取組内容について

AB層の割合は、昨年度から減少し57.2%にとどまった。但し定着度に関してはおよそ6割ほどで、既習内容が身に付いている児童の割合が多いことが分かった。一方で、昨年度と比較して印象的なのは、18.7%と高い値を出したD層に分布する児童の割合だ。単元によっては、当該学年までの積み重ねが定着度に対し大いに影響し、深刻さがうかがえる。算数少人数授業を実施しても、ゆっくり進めていきたい児童の割合は明らかに多い。今後は、授業時間、休み時間では追い付けない内容に関して、丁寧な家庭学習のやり方を示すなど工夫が必要になってくる。また、各家庭に家庭学習の支援、や協力を声掛けしていく必要がある。

《学校の取組》

・教員の指導力向上

本校では、「ふたば小教員スタンダード」の周知を全教員に行っている。「ふたば小教員スタンダード」とは、全学年、学級で統一して確かな学力が児童に身に付くよう、環境構成の徹底を教員同士で行っているもので、学習の基盤を整えていくのに寄与している。また、教員同士が学び合い、育ち合う風土も大切であると考え、教員の指導力向上を目指した校内研修会や校内自主研究会も定期的に行っている。今後もこのような取組から、引き続き算数科をはじめとした指導力の向上に努めていく。

・基礎学力の保障

本校では、朝学習の時間を活用して基礎的な計算に取り組む時間を毎週設定している。加えて、放課後補習や復習における既習事項の確認を行っている。

四則計算を主とした基礎的な計算力は、低学年から積み重ねることで系統だった成果が見られる。そのため、当該学年の計算はもちろん、既習事項の確認はなおのこと必須だと考える。

さらに、江戸川区が実施する「放課後学習教室EDOスク」では、算数に苦手意識のある児童に対して、週に1度の学習教室も実施している。

・学習習慣の確立

国語科同様、本校では学習習慣の確立のため、全学年での家庭学習の実施、提出を目指している。その中でも、中学年以上は自主学習の実施を行い、主体的に自己の得意や苦手と向き合い、改善していく時間を設けている。

加えて、「学習の約束」を毎学期始めに児童と共に確認している。よりよい学習は環境から創っていけると考え、学習の準備、話の聞き方、ノートの書き方など基本的な学習に向かう約束の徹底を目指している。

・AB層の育成

算数科のAB層に分布する児童は関心や主体性も高く、定着度も比例して高い。そのため、個別最適な学びを紡いでいけるよう、教員の授業構成の工夫が求められる。学んだことがどのように生活に関わっているのかを常に結びつけられるよう問い掛け、生活の中で生きて働く知識・技能の習得を目標に掲げていく。

一方でCD層に分布する児童は、低学年の頃の苦手意識もあり定着度はもちろんのこと、主体性も低い。直近では、この問題の対処を以上の取組を中心に力を入れていく。